

京機会ニュース



京機会事務局
〒615-8540 京都市西京区京都大学桂 C3棟 b棟4階(b4S13)
TELFAX:075-383-3713 E-mail:jimukyoku@keikikai.jp
URL:<https://keikikai.jp/>

No.43

2021 October



特集① 京機会最新名簿発行(CD版)のご案内

特集② 若人から老人まで — 古今東西の言葉も交えて気ままに巡る

特集③ 祝・山西 利和選手 オリンピック銅メダル おめでとう!

▶ CONTENTS

- 02| 関西支部主催 同窓会企画のご案内
- 03| 2022年度京機会総会(オンライン生中継)のご案内 / 学生と先輩との交流会のご紹介
- 04| 2021年度京機会総会報告・関連事項
- 07| 京機会名簿発行のご案内と会員データ登録のお願い
- 08| 会費納入のお願い / 令和2年度卒業式の風景
- 09| 学生会員への京機会活動紹介 / 令和2年度大学院学位授与式の風景
- 10| 支部だより
- 15| 京都大学桂図書館 Virtual Tourのご紹介
- 16| 若人から老人まで — 古今東西の言葉も交えて気ままに巡る
- 17| 京機短信のご紹介
- 18| 教員の異動(お知らせ) / 工学研究科記念植樹のご紹介
- 19| 会員のページ
- 20| 祝・山西 利和選手、オリンピック銅メダル / 京大フォーミュラプロジェクト KART からのお知らせ



若人から老人まで — 古今東西の言葉も交えて気ままに巡る

1. 京機会 — 80歳の年齢差を越えて血が通う組織

この3月末で22年間お世話になった京大を定年退職しました。それとほぼ同時に新型コロナウイルスのワクチン優先接種の「65歳以上の高齢者」の対象となり、「俺が高齢者？ こん畜生！ 最後でいいわい！」と、自覚に欠け思い上がった葛藤がありました。そんなこともあり近ごろは年齢のことが日常的に気になります。

京機会で考えますと、最若年会員は物理工学科の2回生で「機械システム学コース」に所属する20歳くらい、一方の最長老会員は100歳くらいですので、同じ京機会会員といっても最大80歳の幅があります。若年会員からは“お爺ちゃん(最初の女子学生の卒業は機械工学教室創立90年目の1987年ですので、女性会員の最年長はまだ50代)”や“お父さん・お母さん”たちの世代、長老会員からは“息子・娘”や“孫”たちの世代、と一緒の組織(集団)です。こんなこと今さら述べるまでもないと思われるかもしれませんが、最大80歳の年齢差がありながらも同じ血が通う組織ってすごくありませんか？ そこで本稿では、若人から老人まで、古今東西の言葉も交えながら気ままに思いを巡らせてみます。

2. 20代前後はすごい

東京オリンピック・パラリンピック2020で金メダルに輝いた日本人選手は多数。オリンピックの方では、最年少が13歳の西矢柊(もみじ)さん、最年長が39歳の上野由岐子さん。パラリンピックの方では、(惜しくも14歳の山田美幸さんは銀メダルでしたが)年長側は50歳の杉浦佳子さんや45歳の道下美里さん。すごいですねえ。杉浦さんや道下さんのような快挙もあるので緩やかな表現としたいのですが、オリンピック・パラリンピックは身体能力がピークとなる若人が活躍する祭典と言えるかと思えます。

一方、知的能力はどうでしょうか？ 定年退職に際し「工学広報No.75」に寄稿した拙文(<https://www.t.kyoto-u.ac.jp/publicity/no75/essay/gamuh0>)でも述べましたが、20代前後の集中力・創造力・突破力にはすばらしいものがあります。昨年度まで学生を指導していた経験からも「ようこんなこと出来たなあ」という若さゆえのパワーに圧倒されることがしょっちゅうありました。もちろん広義の知的能力というか人間的な力は経験を踏まえて広く深くなり、さらに人脈なども太くなっていきますので、社会における職務や責任も年齢とともに重くなっていく訳ですが、一般にそうだからといって、駆け出しの若人のポテンシャルを過小評価しては絶対なりません。

3. 50代前後だってまだまだ

緊急事態宣言を繰り返しながらも、言葉が薄っぺらで国民の心に届かないわが国のリーダーを見ていると、羨ましく思い出されることがあります。

6月18日というと京大の創立記念日がまず頭に浮かぶのではないかと思います。フランス国民にとって1940年6月18日は、1789年7月14日(現在7月14日は革命記念日)と並んで最も重要な日です。というのも、シャルル・ドゴール(1890-1970)が亡命先のロンドンのBBCスタジオ

から、ナチス・ドイツ占領下にあった祖国フランスに向けてレジスタンス「自由フランス(France libre)」の呼びかけを行った日だからです。当時、ドゴールは国防(陸軍)次官に過ぎなかったものの、「私は49歳にして、運命の手によっていっさいの系列の外にほうりだされた人間として、冒険のなかへ入っていったのである。」《A 49 ans, j'entraî dans l'aventure, comme un homme que le destin jetait hors de toutes les séries.》(ドゴール大戦回顧録)と表現したように、その後のフランスを救ったのでした。このように、20世紀の巨人(評価は人により分かれるでしょうが、身長は196cmで文句なし)の大冒険が始まったのは50歳ごろでした。50代前後、まだまだチャンスです。

4. 大人と老人たるもの — 警鐘と理想の姿

そして我が世代。拙稿(京機短信 No.319)でも引用しましたが、後藤正治氏(京大農1972年卒)の「タテカン考・若者考」(日経新聞、2018年9月18日)から、次の言葉には深く共感します:「いつの時代も、若者たちの表現活動はアナキーな色彩を含んでいて、大人たちは眉をしかめるものだ。いずれにせよ、若者が次の時代を担っていく。大人たちにできることはあまりないのだと思う。せいぜい、邪魔をせずにほっておく。それがベターな選択ではあるまいか —。」

さらに、「高齢者」の範疇に入った筆者が近ごろよく思い浮かべるのは、別子銅山中興の祖と呼ばれる伊庭貞剛(いばていごう、1847-1926、58歳で引退)の言葉です:「事業の進歩発達に最も害をするものは、青年の過失ではなくて、老人の跋扈である。」“The greatest damage done to the positive development of a venture is caused not by the errors of the young but by the domination of the old.”(Roger Pulvers東工大名誉教授による名訳も付記しました。「英語で味わう名言集」、NHK出版、2011。)

若人との関係を離れて、老人自身の理想の姿として思い浮かぶのはゲーテ(1749-1832)の言葉です:「老いてはがんぜない子供に返ると人は言うが、そうじゃなくて、老いてこそ神に近いほんとうの子供に育つのですよ。」„Das alter macht nicht kindisch, wie man spricht, Es findet uns nur noch als wahre Kinder.“(手塚富雄訳、「ファウスト」第一部 212段、中公文庫、1974;手塚富雄、「いきいきと生きよ」、講談社新書、1968。)

さらに、史上最高の実験科学者ファラデー(1791-1867)は、晩年にナイト爵位を打診されたとき、以下のように辞退したそうです:“I must remain plain Michael Faraday to the last.”(C.A. Russell, Michael Faraday, Oxford, 2000.) なんと清々しく気高い言葉ではありませんか。

5. おすびは全世代を没後2500年の孔子で

京機会ニュース中の駄文を、ストイックなファラデーで重苦しく終わるのもなんなので、トーン変更。桑原武夫先生(1904-1988)は、筆者が最も尊敬する京大らしい大先生の一人です。桑原先生はフランス文学が専門である

にもかかわらず、中国文学の泰斗である吉川幸次郎先生と小川環樹先生(小川芳樹・貝塚茂樹・湯川秀樹を兄とする超秀才兄弟の四男)から請われて執筆された孔子(B.C.552-B.C.479=没後2500年!)の「論語」(ちくま文庫、1985)があります。その「為政第二」

「子曰、吾十有五而志于學。三十而立。四十而不惑。五十而知天命。六十而耳順。七十而從心所欲不踰矩。」

について、先生の面目躍如たる文章を引用します。

子曰わく、吾(わ)れ十有五(じゅうゆうご)にして学に志す。三十にして立つ。四十にして惑わず。五十にして天命を知る。六十にして耳順(したが)う。七十にして心の欲する所に従いて矩(のり)を踰(こ)えず。

(中略)

最後に、冒瀆的と見えることを恐れず私の感想を一つつけ加えると、人間の成長には学問修養が大いに作用するが、同時に人間が生物であることもまた無視できないであろう。「天命を知る」というのは、自分がこの世で完遂すべき使命を自覚することであると同時に、五十の衰えの感覚から自分としてはこうしかならないのだということを受け、その運命の甘受の中で生きようと思うこともある。自信であると同時に諦念である。「耳順」は、自覚的努力というより、生理的作用する寛容、あるいは

原理的束縛からの離脱であることが少なくないのではないか。よく言えば素直さだが、あくまで突進しようとするひたむきな精神の喪失ともいえる。「心の欲する所に従いて矩を踰えず」というのは、自由自在の至上境といえるが、同時に節度を失うような思想ないし行動が生理的にもうできなくなったということにもなる。それは必ずしも羨ましい境地とは言えないのではない。これ以上飲むと明日頭が痛かろう、と思って、意志的に盃をおくのが立派なのであって、飲んでいるうちにいつのまにか盃が手を離れるというのでは、いささか淋しかろう。そう思うのは、いつまでも悟れない人間の愚かしい感想だろうか。しかし孔子もまた人であって、彼の発言が無意識的に彼の生理的諸段階を反映しているかもしれないのである。

うーん、本稿の整理運動的位置づけ? テンションは下がってしまいましたが、孔子に対してこんなこと、桑原先生をおいてはなかなか書けないでしょうね。



吉田 英生 (S53/1978卒)

京機短信のご紹介

「日本械産業の発展の中心に京大機械系学科を存在させ、日本の豊かさや平安に貢献する義務が我々にはあります。大学企業双方において、誰が何をやっているかをお互いに知り、相互理解、研究・教育を活性化させ、その上に立って機械系教室OBと大学とが連携し相互の発展を目指す必要があります。産業界と大学機械系教室との共同戦線を構築して、双方の利益を図る」ことを趣旨として、2004年12月に久保 愛三名誉教授(1966)のお世話により「京機短信」が創刊されました(毎月5日と20日)。



～ 短信356号 ～

2017年5月発行の301号からは、吉田 英生名誉教授(1978)のお世話の元、毎月5日に発行しています。

2022年9月5日現在で、号外等も含め発行数は、総計358号となりました。

現在の京機短信では、「わたしの仕事シリーズ」「わたしたちの研究シリーズ」「わたしの仕事(シニア編)」がシリーズで連載されています。シリーズ毎に京機ホームページからお読みいただけます。



<https://keikikai.jp/publications/tanshin/>

●わたしの仕事シリーズ: 30代から40代のご卒業生を中心に、主に在学生対象として、仕事について面白さや難しさややり甲斐など、いろいろな側面からご自身の「仕事」について語っていただいております。現在33名に執筆いただいております、学生だけでなくご卒業生からも好評です。

●わたしたちの研究シリーズ: 2021年4月号から、教員による機械系関連教室研究室紹介の連載が始まりました。同記事では研究と共に各研究室の歴史や所属教員の紹介なども詳しく紹介され、皆様にとっても興味深い内容となっております。現在は6研究室の紹介が終了しました。皆様の所属研究室紹介もこれから続きます。楽しみにお待ちしております。

●わたしの仕事(シニア編): 短信編集者(吉田名誉教授)が知る「ご退職後も、興味深い人生を歩んでおられるご卒業生」に執筆依頼され、2021年7月からシリーズが始まりました。不定期掲載ですが、近々第2回が掲載予定です。

<原稿執筆のお願い>

原稿は、短信原稿 tanshingenko@keikikai.jp 宛にお送りください(事務局と編集人に届きます)。ワードで適当に書いていただいても結構ですし、テキストファイルと図・表・写真などを別のファイルで送っていただいても結構です。原則として毎月5日発行ですので、「前月の月末」には上記まで送信いただくようお願いいたします。